

琉球大学学術リポジトリ

子どもの音楽における発達と評価に関する研究 —
教育実践現場における活用をめざして—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2012-04-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 典子, 比嘉, 絵美, 緒方, 茂樹, Oshiro, Noriko, Higa, Emi, Ogata, Shigeki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24215

子どもの音楽における発達と評価に関する研究 —教育実践場面における活用をめざして—

大城典子* 比嘉絵美** 緒方茂樹***

Approach to the Children's Musical Development and Evaluation —practical use for educational fields—

Noriko OSHIRO* Emi HIGA** Shigeki OGATA***

要旨

本研究では我々がこれまで開発してきた「子どもの音楽における発達と評価に関するツール」について、健常乳幼児に対してツールの試用を行い、設定項目が実際の発達段階に相応しい項目であるのか否かを検証するために、ツールの信頼性及び妥当性に関して検討を加えた。本研究では試みとして、信頼性の検証については、 α 係数の算出による内的整合性の検討を行い、妥当性の検証については、共分散構造分析による構成概念妥当性について検討を加えた。その結果、信頼性及び妥当性双方について検証することができたと考えている。これまで得られた所見と併せて、音楽を通じてそこに内包されている子どもの様々な発達の様子を知ることができるツールとして、その精度と客観性がさらに上がったものと考えられる。今後は、乳幼児期における子どもはもちろん、発達に遅れのある子どもの全般的な発達を客観的に評価することができるツールとして、教育実践場面等における活用の機会が増えることが期待できる。

I. はじめに

1. 子どもの音楽的活動の発達と評価

人は、胎児期から母親の腹壁と羊水を通して音を感じることができるといわれており、さらに新生児は胎内で日常的に聞いたであろう母国語や母親の声に対して、より敏感に反応するという所見も得られている¹⁾。このように、人は胎児期から外部の音を聴いているといえる。そして、誕生した後も外部環境に応じて様々な音響刺激を受けながら成長・発達していく。例えば、最初は音に対して示していた原始的反射が成長に伴って次第に消失し、次の段階では学習を基盤とした反射に移行していく。成長が進むと、音楽に対する快・不快に見られるような情動的な反応を示すようになっていく。さらに成長が進

めば、子どもたちは発達の段階に応じて歌を歌ったり（歌唱）、楽器や玩具に触れて音を出したり（器楽：演奏）、音楽に合わせて身体を動かして自己表現をしたり（身体表現）、音や音楽にじっと耳を傾けたりする（鑑賞）ような様々な音楽的活動を体験していくようになる。このような子どもの音楽的活動の成長は、単に音楽的な能力の成長のみならず、ことばの発達や身体表現などの手足を動かす運動機能の発達、音を聞き分ける聴覚の発達や認知、音を聴いて感じる快・不快などの感情表出など、いわば心身全般の発達と大きく関係しているものと考えられる²⁾。

翻って子どもの全般的な発達とはどのように捉えられるものであろうか。子どもの発達とは、個体が受胎から成熟するまでの内的心理的傾向（能力、性

* 粟国村立粟国小中学校

** 沖縄県立名護特別支援学校

*** 琉球大学教育学部

格特性等)がどのように変化するかを指すとされている¹⁴⁾。その中でも、特に子どもの発達においては、発達の連続性、順序性、方向性、個人差、そして文化と統合の5点の原理があるとされている⁶⁾。このような原理に基づきながら、子どもは身体的、心理的、社会的な発達を遂げていくものと考えられる。一方で、このような子どもの発達に対する評価について考えてみると、日本国内においては母子保健法に基づき、市町村による健康診査が行われている⁹⁾。この健診等で発達の遅れなどが指摘された場合には、精神発達面の評価を行うための心理尺度が用いられる。この心理尺度の効用として、1)客観的かつ科学的に診断できること、2)観察や面接で分からないことが診断できること、3)指導相談の指針を得ることができること等があげられる¹¹⁾。また、心理尺度の中でも、乳幼児の発達に関する主な知能検査及び発達検査には、ウエクスラーによるWPPSI知能診断¹⁶⁾及びWISC-Ⅲ知能検査¹⁷⁾、ビネーによる原法を基にした全訂版田中ビネー知能検査²⁴⁾、幼児・児童の知能と習得度を個別に測定することができるK-ABC心理・教育アセスメントバッテリー¹⁰⁾等があり、これらは、医療機関、保健所、児童相談所等で利用されている。一方で教育の分野に目を向ければ、特に特別支援教育の場面において子どもの評価を必要とする機会が多い。特別支援教育の実践に当たっては、個々の子どもの客観的な実態把握が不可欠であることから、上述した既成の評価尺度のみならず、学校現場で容易に応用可能な発達の評価ツールの開発が強く望まれるところである。

2. 音楽を用いた子どもの発達評価

前述したように子どもの音楽的活動の成長は、単に音楽的な能力の成長のみならず、子どもの心身全般の発達と大きく関係しているものと考えられる。このことから、音楽的行動の発達は、すなわち子どもの一般的な発達と極めて密接な関係にあるといっても過言ではない。このことに着目してここからは、特別支援教育の実践場面を想定し、音楽を活用しながら子どもの発達を評価するための方法論について考えていく。子どもの音楽に関わる発達について、江尻(1999)¹⁾は、乳児の言語表出活動を身体運動から捉え、規準喃語の出現に先立って、手足のリズミカルな自発運動が豊富に認められる時期があることを示す等、発声と身体的な運動との密接な関連性を示唆した。また、南(1999)¹²⁾は、幼児期における自発的な歌唱は、非伝達的な音楽の世界へ遊ぶ行

為であるとした。さらに、YAMAHA音楽研究所において、選好法を用いた子どもの音楽知覚に関する実験的研究^{18) 19)}や、音楽的な発達の定義そのものを検討しながらの音楽発達に関わる雛型作成、子どもの音楽発達と大人とのコミュニケーションの実像との関わりを明らかにすることを目的とした縦断的研究²⁰⁾が行われている。このように、子どもの音楽に関わる発達に関してはこれまでに様々な研究が行われてきているものの、「発達という観点に立った明確な評価尺度」に関して具体的に示した研究に限ってみれば未だ少ないといわざるをえない。

一方で子どもの発達に関わる評価については、上述したように各種心理検査が考案されている。これらの心理検査の背景には、原則として特定の心理学的理論が存在していることから^{10) 15) 16) 24)}、得られる所見については、認知や身体、あるいは社会性など、用いた心理学的理論に基づいた特定の要素に限られることはいうまでもない。それらは子どもの発達を要素別に詳細に知ろうとした際には極めて有効であろう。しかし一方で、実際の教育実践場面においては、子どもの心理的、身体的、あるいは社会的な発達の状態を、「総合的にみる」必要に迫られる場合がほとんどである。心理検査の中には、子どもの全般的な様子を評価することができるよう作成された発達検査^{23) 26) 27)}も考案されているが、特別に時間を設けて評価する必要もあり、実際の教育実践場面においては時間的制約等の面から困難である場合も少なくない。

ここで、改めて音楽の機能について鑑みると、それは心身全般の発達と大きく関係しており⁴⁾、それこそが音楽の持つ大きな特性の一つであると考えられる。音楽は特別支援教育のみならず、実際の教育実践場面において教材として広く使われていることはいうまでもない。仮に、音楽を子どもの発達評価の具体的な指標として用いることができれば、教育実践場面において、評価のために特別な時間等を設けることなく、普段の子どもの音楽的反応や活動の様子を観察することで発達評価が可能となる。このことはすなわち、音や音楽に関わる子どもの実態を評価することにより、音楽を通じてそこに内包されている子どもの様々な発達の様子を知ることができることを示している。さらに音楽が非言語的媒体であることを積極的に考慮すれば、特に乳幼児期における子どもや、発達に遅れのある子どもの全般的な発達を見る際に音楽は極めて有効な手段になるものと考えられる。

3. これまでに開発してきた発達評価ツール

以上述べてきたことを踏まえて、與座ら (2004)²⁸⁾ は、「音楽は認知や情動など様々な要素が内包しているという特性を持っていることから、音楽を通じた発達を一つの流れとして捉えることにより、子どものさまざまな面における発達を知ることができる。従って、音楽を通じて子どもの実態把握及び具体的な取り組み案を考案することが可能となれば、子

どもの発達支援へ繋げていくことができる。」と述べ、子どもの実態把握の手段として音楽の有効性を示唆している。そこで、障害児教育において活用される機会の多い音楽を音楽の持つ大きな特性に着目し、それを一つの手がかりとして子どもの評価を行う、新たな発達指標及び取り組み案として7点のツールの作成を試みている (図1)。

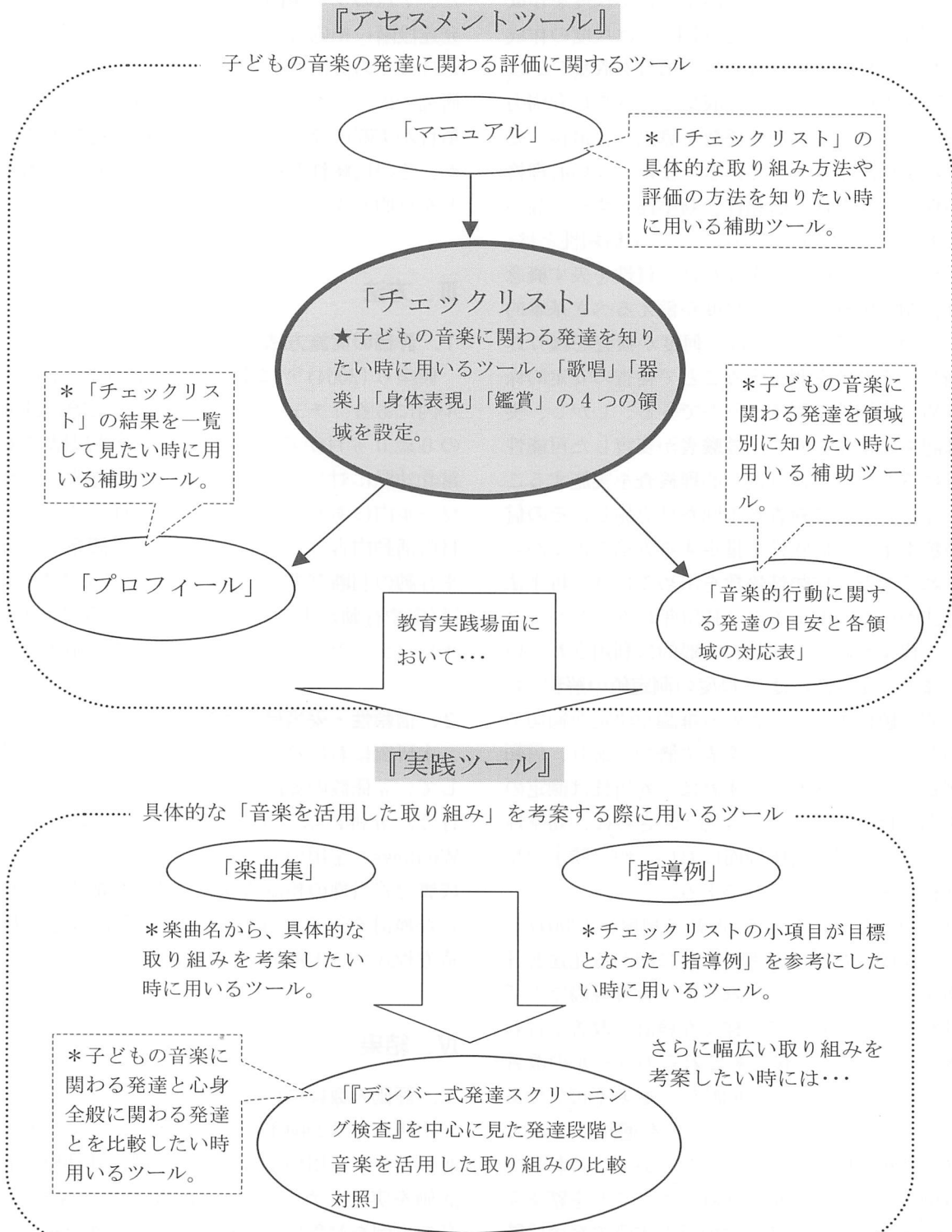


図1 音楽を手がかりとした子どもの評価に関する7点のツール (與座ら, 2005)²⁸⁾

ここで心理検査を作成するアプローチとして、村上(2006)¹³⁾は論理的方法、因子分析的方法、基準関連的方法の3つがあると述べている。これに従えば、與座ら(2004)²⁸⁾の行ったアプローチは、論理的方法によるアプローチを試みたといえる。論理的方法は、測定対象を論理的に吟味して質問項目を集める方法である。測定対象は特定の理論的な構成概念等が挙げられ、その対象を論理的に分析し、関連した事柄を質問の形式に書き出すことで尺度を作成する¹³⁾方法である。さらに、村上¹³⁾は尺度の作成手順として、最初に項目分析等で項目を収集し、次に試作版を実施してデータを収集し、さらに弁別力の分析を行った上で信頼性係数を算出し、最後に妥当性係数を算出するとしている。また、よい心理検査の条件は、妥当性、信頼性、効率性がすべて高いことである¹³⁾とも述べている。ここで信頼性とは、検査や尺度の測定値の安定性及び一貫性を表す概念であり、測定用具としての尺度が備えるべき基本的条件の一つである³⁾。例えば、何度か検査を繰り返し実施し、その値を測定することで検査の安定的係数を求め、信頼性を測ることができる。しかし、実際には記憶による影響や、被験者が変容した可能性等を避けるために、繰り返し心理検査を実施することは少ない。そこで検査を1回だけ実施し、その信頼性係数を求め、信頼性を推定する方法が古くから用いられてきた。信頼性係数を求めるには、折半法等の方法がいくつかあるが、1951年にクロンバックによって提案された α 係数が一般的に利用されている¹³⁾。また、妥当性とは、「尺度の測定値の解釈、および、測定値によってなされる推論や決定が適切であるかどうか、その程度」を表す概念であり、信頼性が測定の精度に関わるとすれば、妥当性は測定の意味を問う概念であるといえる³⁾。さらに、効率性に関しては、実際の臨床場面において使い勝手の良い心理検査を試作することである。

これらのことを踏まえて、改めて與座ら(2004)²⁸⁾によって作成された子どもの音楽に関わる発達と評価に関するツールについてみると、教育現場での活用を目的としてこれまでに様々な検討・改善が行われてきた^{2) 5) 22) 29)}。今後ともこれらのツールの改善は継続されるべきであると同時に、必要不可欠であることから、現在も実際にツールを適用しながらデータの蓄積を図っているところである。これまでに数百例のデータの蓄積がされてきたことを踏まえて、本研究では、「評価表」の項目が実際の発達段階に相応しい項目であるのか否か、その信頼性及び妥

当性に関して検討を加える。本研究において、ツールの信頼性及び妥当性が検証できれば、評価ツールとしての完成度をさらに高めることができ、実際の教育実践場面におけるより有効な活用が期待できる。

II. 目的

これまでに、與座ら(2004)²⁸⁾によって作成された、7点のツール内の「チェックリスト」が実際の発達段階に相応しい項目であるのか、実際にできるだけ多くの健常児に対して評価を実施してきた。本研究では、これまで得られた資料を基に、設定した項目が実際の発達段階に相応しい項目であるのか否か、その信頼性及び妥当性に関して検討を加えることを目的とする。

III. 方法

1. 評価の実施方法

與座ら(2004)²⁸⁾によって作成された、7点のツール内にある「チェックリスト」を、実際に沖縄県内の0歳0ヵ月から6歳11ヵ月の発達段階にある健常乳幼児に対して適用し、評価を実施する。評価はツール内にある「マニュアル」に従って行い、各項目の活動内容について、対象児から観察できる反応や行動の判断基準を「できる」(+), 「できない」(-), 「反応や行動が少し見られる、できそうである(芽生え)」(±)の3つに分類し、評価を実施する。

2. 信頼性・妥当性の検証方法

本研究における信頼性の検証については、試みとして、 α 係数の算出による内的整合性の検討により行う。分析には、「統計解析ソフトSPSS11.0-J for Windows」を用いる。また、妥当性については、構成概念妥当性の検証方法となる共分散構造分析を用いた検討を行う。分析には、「共分散構造分析/構造方程式ソフトAmos」を用いる。

IV. 結果

1. 評価人数について

本研究では2004年から2010年にかけて、前述した評価ツールを用いて沖縄県内の健常乳幼児を対象に評価を実施した^{2) 22) 28)}。2010年までに収集した352名の事例を対象に、信頼性及び妥当性の検討を行った。表1に2010年までに収集した全健常乳幼児の発

表1 発達年齢による内訳 (n=352)

発達年齢	人数
0歳0ヶ月～0歳11ヶ月	37
1歳0ヶ月～1歳11ヶ月	62
2歳0ヶ月～2歳11ヶ月	57
3歳0ヶ月～3歳11ヶ月	52
4歳0ヶ月～4歳11ヶ月	46
5歳0ヶ月～5歳11ヶ月	48
6歳0ヶ月～6歳11ヶ月	50

達年齢の内訳を示す。

2. 信頼性について

本研究において検討の対象とする「チェックリスト」に関して、その内容及び項目数を表2に示した。「チェックリスト」は、4つの領域別に、大項目、中項目、小項目を分類した上で、各項目を発達段階に沿って年齢の幅に配列したものである。分析に用いた事例数は352例であった。しかし、鑑賞に関する領域においては、鑑賞に関わる評価項目作成が遅れたために、事例数は143例であった。

まず始めに、各領域について α 係数の算出を行った。その結果、それぞれの領域における α 係数は、歌唱に関する領域が0.970、器楽に関する領域が0.968、身体表現に関する領域が0.970、鑑賞に関する領域が0.966であった(表3)。次に、「チェックリスト」の項目の配列が実際の発達段階に相応しい項目であるのか否かを細かく検討するために、発達年

表2 「チェックリスト」の内容及び項目数

領域	内容	大項目	中項目	小項目
歌唱	ことばの発達から歌唱に関する発達まで	5	11	各4計44
器楽	微細運動の発達から器楽に関する発達まで	4	11	各4計44
身体表現	粗大運動の発達から身体表現に関する発達まで	4	11	各4計44
鑑賞	鑑賞に関する発達	3	11	各4計44

る領域が0.966であった(表3)。次に、「チェックリスト」の項目の配列が実際の発達段階に相応しい項目であるのか否かを細かく検討するために、発達年

表3 各領域における α 係数 (n=352)

領域	α 係数
歌唱	0.97
器楽	0.96
身体表現	0.97
*鑑賞	0.96

(*鑑賞に関する領域はn=143)

齢による目安につき設定された項目である中項目において、 α 係数の算出を行った。その結果、それぞれの中項目における α 係数は、歌唱に関する領域が0.978から0.757、器楽に関する領域が0.994から0.858、身体表現に関する領域が0.995から0.759、鑑賞に関する領域が0.992から0.888であった(表4)。

表4 各中項目における α 係数 (n=352)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
歌唱	0.757	0.987	0.976	0.980	0.967	0.978	0.977	0.983	0.984	0.972	0.874
器楽	0.858	0.975	0.978	0.994	0.964	0.970	0.964	0.970	0.975	0.943	0.919
身体表現	0.759	0.995	0.947	0.986	0.979	0.976	0.984	0.986	0.980	0.968	0.982
*鑑賞	0.888	0.968	0.989	0.992	0.987	0.991	0.986	0.979	0.976	0.967	0.905

(*鑑賞に関する領域はn=143)

3. 妥当性について

本研究における妥当性の検証においては、共分散構造分析による構成概念妥当性の検討を行った。構成概念は直接測定することはできないために現象の背後に潜む因子として仮定され、測定された項目間

の相関関係から推定される⁷⁾。したがって、仮説的な因子の検証を行うために、検証的因子分析モデルを作成し、分析を行った。

まず始めに、4つの領域ごとに仮説構造モデルを作成した。ここでは例として、歌唱に関する領域に

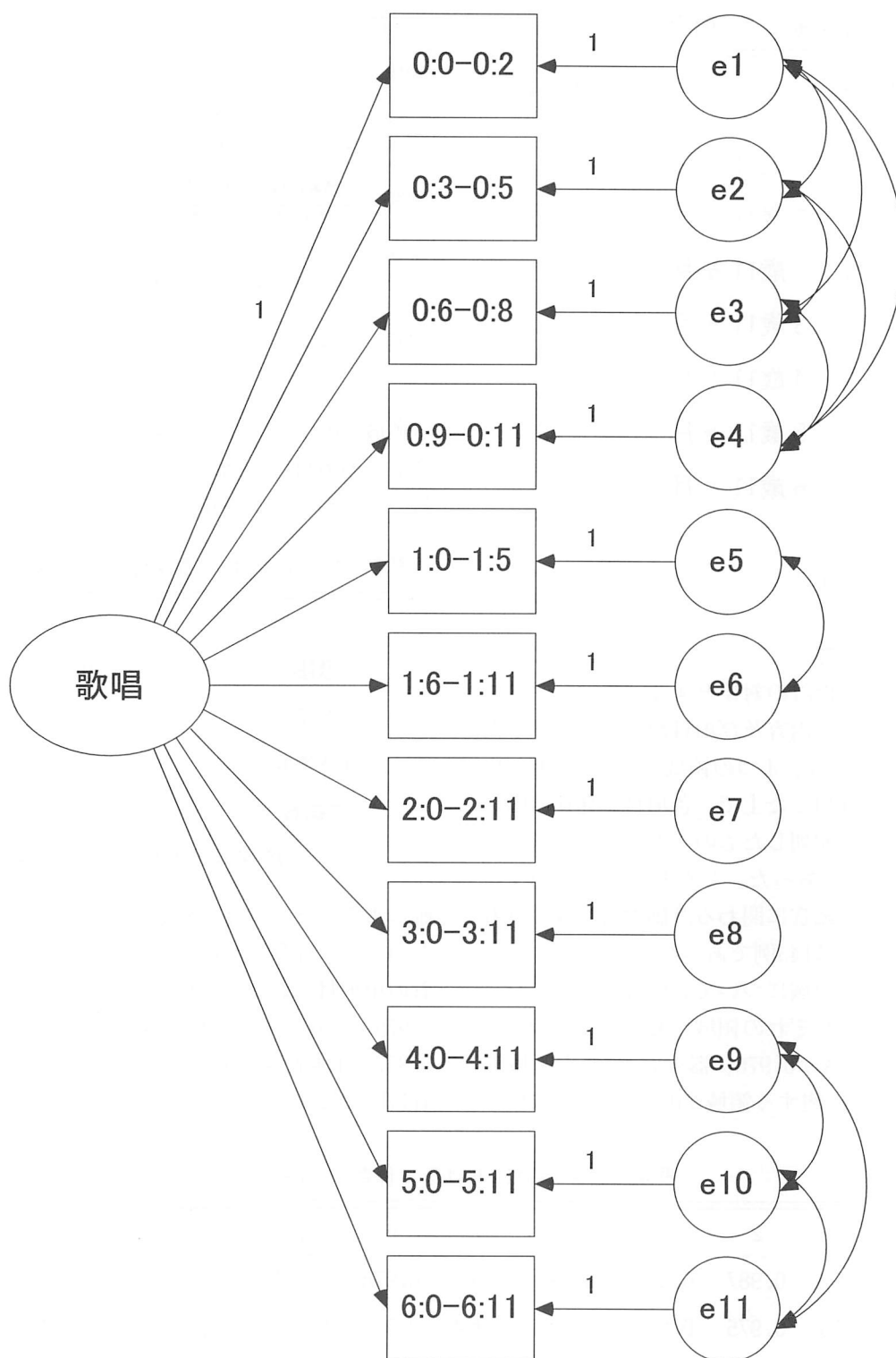


図2 歌唱に関する領域における仮説構造モデル

における仮説構造モデルを示した(図2)。モデルにおける潜在変数には、各領域名を使用した。また本チェックリストは、表3で示した通り領域ごとに大項目・中項目・小項目から構成されている。今回の検証に当たっては、中項目にそれぞれの領域に対応する発達の目安が設定されていることを踏まえて変数名として使用し、この中項目における評価を観測

変数とした。さらに、本チェックリストにおける中項目は、大項目の下位項目として設定されている²⁹⁾ため、同じ大項目に分類されている各中項目における誤差変数に相関が見られることを想定し、相関のパスを追加した。

次に、作成した仮説構造モデルに基づき、最尤法を用いて分析を行った。また、モデルの評価について

表5 歌唱に関する領域における推定値 (* < .05 ** < .01)

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
0:0-0:2	<--- 歌唱	1.000			
0:3-0:5	<--- 歌唱	2.250	.379	5.939	**
0:6-0:8	<--- 歌唱	4.625	.912	5.071	**
0:9-0:11	<--- 歌唱	6.500	1.382	4.702	**
1:0-1:5	<--- 歌唱	12.898	3.162	4.079	**
1:6-1:11	<--- 歌唱	16.009	3.872	4.134	**
2:0-2:11	<--- 歌唱	21.724	5.200	4.178	**
3:0-3:11	<--- 歌唱	21.633	5.201	4.159	**
4:0-4:11	<--- 歌唱	18.261	4.453	4.100	**
5:0-5:11	<--- 歌唱	13.844	3.472	3.988	**
6:0-6:11	<--- 歌唱	6.248	1.713	3.648	**

ては、モデル適合度指標によって適否を判定した。修正した適合度指標であるCFIを用いて判定を行
本研究では、独立モデルを導入したNFIの欠点をい、CFIの採択基準は0.9以上であった⁷⁾。

表6 器楽に関する領域における推定値 (* < .05 ** < .01)

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
0:0-0:2	<--- 器楽	1.000			
0:3-0:5	<--- 器楽	2.833	.517	5.476	**
0:6-0:8	<--- 器楽	5.966	1.507	3.958	**
0:9-0:11	<--- 器楽	7.859	1.949	4.034	**
1:0-1:5	<--- 器楽	14.136	3.374	4.190	**
1:6-1:11	<--- 器楽	19.119	4.549	4.203	**
2:0-2:11	<--- 器楽	18.207	4.376	4.160	**
3:0-3:11	<--- 器楽	15.878	3.882	4.090	**
4:0-4:11	<--- 器楽	12.399	3.143	3.945	**
5:0-5:11	<--- 器楽	8.589	2.297	3.739	**
6:0-6:11	<--- 器楽	4.012	1.289	3.112	*

歌唱に関する領域における仮説構造モデルについて1%水準で有意であった。また、表5に示した通り、
て分析を行った結果、カイ二乗値は304.596であり、各項目間の推定値については、11項目全てにおいて

表7 身体表現に関する領域における推定値 (* < .05 ** < .01)

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
0:0-0:2	<--- 身体表現	1.000			
0:3-0:5	<--- 身体表現	3.795	.869	4.368	**
0:6-0:8	<--- 身体表現	8.369	1.741	4.806	**
0:9-0:11	<--- 身体表現	12.715	2.576	4.937	**
1:0-1:5	<--- 身体表現	17.500	3.531	4.957	**
1:6-1:11	<--- 身体表現	17.259	3.520	4.904	**
2:0-2:11	<--- 身体表現	16.778	3.503	4.790	**
3:0-3:11	<--- 身体表現	14.166	3.118	4.543	**
4:0-4:11	<--- 身体表現	10.833	2.576	4.206	**
5:0-5:11	<--- 身体表現	7.673	2.045	3.752	**
6:0-6:11	<--- 身体表現	5.555	1.688	3.291	**

1%水準で有意であった。さらに、モデル適合度指標CFIの値は.920であった。

器楽に関する領域において、仮説構造モデルについて分析を行った結果、カイ二乗値は373.838であり、1%水準で有意であった。また、表6に示した通り、各項目間の推定値については、11項目において1%及び5%水準で有意であった。さらに、モデル適合度指標CFIの値は.901であった。

身体表現に関する領域において、仮説構造モデルについて分析を行った結果、カイ二乗値は327.056

であり、1%水準で有意であった。また、表7に示した通り、各項目間の推定値については、11項目全てにおいて1%水準で有意であった。さらに、モデル適合度指標CFIの値は.909であった。

鑑賞に関する領域において、仮説構造モデルについて分析を行った結果、カイ二乗値は134.682であり、1%水準で有意であった。また、表8に示した通り、各項目間の推定値については、11項目において1%及び5%水準で有意であった。さらに、モデル適合度指標CFIの値は.921であった。

表8 鑑賞に関する領域における推定値 (*<.05 **<.01)

	推定値	標準誤差	検定統計量	確率
0:0-0:2 <--- 鑑賞	1.000			
0:3-0:5 <--- 鑑賞	1.750	.174	10.045	**
0:6-0:8 <--- 鑑賞	2.979	.444	6.704	**
0:9-0:11 <--- 鑑賞	3.652	.531	6.879	**
1:0-1:5 <--- 鑑賞	3.613	.541	6.685	**
1:6-1:11 <--- 鑑賞	3.437	.593	5.800	**
2:0-2:11 <--- 鑑賞	2.825	.678	4.169	**
3:0-3:11 <--- 鑑賞	2.235	.658	3.397	**
4:0-4:11 <--- 鑑賞	1.561	.590	2.646	*
5:0-5:11 <--- 鑑賞	1.097	.557	1.969	*
6:0-6:11 <--- 鑑賞	.556	.436	1.875	*

V. 考察

1. 信頼性について

α 係数の算出は4つの領域および各領域の中項目ごとに行った。また、分析に用いた事例数は352例であったが、鑑賞に関する領域においては、小項目の作成後の事例を対象としたために143例となった。その結果、4つの領域における α 係数は0.966から0.970であった。さらに各領域の中項目ごとにおける α 係数は0.757から0.995であった。

信頼性係数は普通0から1.00の範囲で変動し、一般的に0.70もしくは0.80以上であれば尺度の内的整合性は高いとされる²¹⁾。したがって、本チェックリストにおける内的整合性は高かったものと考えられる。前述したように、信頼性係数とは、テストや尺度の測定値の安定性・一貫性・正確さを表す概念であり、測定用具としての尺度が備えるべき基本的条件の一つである²⁾。したがって、信頼性係数の推定の一方法とはいえ、本チェックリストは内的整合性が高かったことから、このツールは信頼性のある心理尺度といえるのではないかと考える。一方で、各

領域において採択基準内ではあるものの α 係数にはばらつきが見られた。このばらつきに関しては、表1に示した通り、特に乳児の事例数が他の発達年齢の事例数と比べ比較的少なかったことによると考えられる。そのため、今後は乳児の事例数を増やしていくことで α 係数のばらつきは少なくなるであろうと考える。しかし、健常乳児については発達のスピードが速い等、様々な理由のため事例を収集することが極めて困難である。現在健常乳児を対象とした事例の収集を精力的に進めているところである。

2. 妥当性について

本研究における妥当性の検証においては、共分散構造分析による構成概念妥当性について扱った。まず始めに、検証的因子分析モデルを作成し、次に最尤法を用いて分析を行った。その結果、それぞれの領域におけるモデル適合度指標CFIの値は、歌唱に関する領域が.920、器楽に関する領域が.901、身体表現に関する領域が.909、鑑賞に関する領域が.921であった。本研究で用いたモデル適合度指標CFIの採択基準は0.9以上であった⁷⁾。

本研究においては、352名を検討の対象とした。これまでの先行研究²⁾においては、収集した事例の少なさから、特に妥当性においては検討を行うことが困難であると言わざるを得なかった。今回は、事例数がある程度収集できたことから、妥当性の検討を試みた。豊田(1998)²⁵⁾は、共分散構造分析によって、構造概念を用いたモデルの適合度を調べることができることを述べている。今回作成したモデルの適合度の検証の結果、仮説構造モデルと実際のデータの適合度は高かったものと考えられる。このモデルとの適合度が高ければ所定の構成概念を測定する尺度の妥当性の根拠となる²⁵⁾。これらのことを考慮して、今回行った検討の範囲内で、構成概念妥当性における妥当性が検証されたものと考えられる。

VI. まとめ

信頼性とは、テストや尺度の測定値の安定性・一貫性・正確さを表す概念であり、測定用具としての尺度が備えるべき基本的条件の一つである²⁾。また、妥当性とは、「尺度の測定値の解釈、および、測定値によってなされる推論や決定が適切であるかどうか、その程度」を表す概念であり、信頼性が測定の精度に関わるとすれば、妥当性は測定の意味を問う概念であるといえる⁴⁾。本研究においては、多数ある検証方法の内のひとつとして、それぞれ信頼性係数である α 係数の算出による内的整合性における信頼性及び、共分散構造分析による構成概念妥当性について検討を加えた。その結果、内的整合性による信頼性及び構成概念妥当性について検証されたことから、本ツールのチェックリストに関しては、ある一定の信頼性及び妥当性があるといえよう。

また、このツールの信頼性及び妥当性が検証されたことにより、教育実践場面における活用の機会が増え、音楽を通じてそこに内包されている子どもの様々な発達の様子を知ることができ、特に乳幼児期における子どもの全般的な発達を見ることができるようであるのではないかと考えられる。本ツールが障害のある子どもの教育実践場面において、発達に沿った子どもの全般的な発達の実態を客観的に評価する一助となり、それに基づいて、個々の子どもの教育的ニーズに即した指導へと繋がっていきけるよう、今後とも事例数を増やしながらかつて更なる検討・改善を行っていく予定である。

謝辞

本ツールの開発に当たって、ご協力頂いた子どもさんを始め、保護者、保育士、教員、行政担当の方々等、全ての関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

文献

- 1) 江尻桂子 (1999) 「言語獲得の基盤としての乳児の音声発達」日本音響学会誌55巻 11 pp. 789-795
- 2) 比嘉絵美 (2007) 「子どもの音楽に関わる発達と評価に関する研究 —教育実践場面における活用をめざして—」平成18年度修士論文
- 3) 堀洋道 監修、吉田富二雄 編 (2001) 「心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉」サイエンス社
- 4) 五十嵐由紀、緒方茂樹 (2001) 「知的障害特殊学級における音楽を活用した取り組み —自閉的傾向を伴う知的障害児の事例を通して—」琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 第3号 pp. 109-123.
- 5) 池間美弥子 (2007) 「子どもの音楽的発達を知るための評価ツール」に関わる実践ツールの改善Ⅰ —実際の教育現場での活用に向けて—」平成18年度卒業論文
- 7) 石田潤、岡直樹、桐木建始、富永大介、道田泰司 (1995) 「ダイアグラム心理学」北大路書房
- 8) 出村慎一、西嶋尚彦、長澤吉則、佐藤進 編 (2004) 「健康・スポーツ科学のためのSPSSによる多変量解析入門」杏林書院
- 9) 厚生労働省 (1965) 母子保健法 (昭和四十年法律第百四十一号) 第12条及び第13条
- 10) 前川久男、石隈利紀、藤田和弘、松原達哉 編 (1995) 「K-ABCアセスメントと指導：解釈の進め方と指導の実際」丸喜メイツ
- 11) 松原達也 編 (2003) 「心理テスト法入門 第4版 —基礎知識と技法習得のために—」日本文化化学社
- 12) 南曜子 (1999) 「言語習得期における〈発話〉と〈歌〉の関係」音楽教育学第29巻2号 pp. 8-20
- 13) 村上宣寛 (2006) 「心理尺度のつくり方」北大路書房
- 14) 無藤隆、高橋恵子、田島信元 編 (1990) 「発達心理学入門Ⅰ —乳児・幼児・児童」東京大学

出版会

- 15) 日本版 WISC-Ⅲ刊行委員会 訳編 (1998) 「日本版 WISC-Ⅲ知能検査法」 日本文化科学社
- 16) 日本心理適性研究所 編 (1976) 「WPPSI知能診断検査指針」 日本文化科学社
- 17) 日本音響学会 (2003) 「音の何でも小事典」 講談社出版
- 18) 二藤宏美 (2002) 「選好法実験における乳児聴取反応の発達的变化」 YAMAHA音楽研究所
- 19) 二藤宏美 (2002-2003) 「0歳児にみられる拍分割タイプへの選好」 YAMAHA音楽研究所
- 20) 二藤宏美 (2004-2007) 「子どもの音楽発達研究」 YAMAHA音楽研究所
- 21) 小塩真司 (2004) 「SPSSとAmosによる心理・調査データ解析—因子分析・共分散構造分析まで」 東京図書株式会社
- 22) 大城典子 (2008) 「子どもの音楽に関わる発達と評価に関する研究—障害児への適用を中心としたアセスメントツールの改善—」 平成21年度卒業論文
- 23) 嶋津峰真、生澤雅夫、中瀬惇 (1990) 「新版K式発達検査実施手引書」 京都国際社会福祉センター
- 24) 田中教育研究所 編 (1987) 「田中ビネー知能検査法」 田研出版
- 25) 豊田秀樹 (1998) 「共分散構造分析 入門編」 朝倉書店
- 26) 津守真、稲毛教子 (1961) 「乳幼児精神発達診断法」 大日本図書
- 27) 上田礼子 (1983) 「日本版デンバー式発達スクリーニング検査 —IDDST-RとJPDQ—」 医歯薬出版
- 28) 與座亜希子 (2004) 「教育実践場面における子どもの発達と評価に関する方法論的研究—音楽に関わる発達支援の観点から—」 平成15年度修士論文
- 29) 與座亜希子、玉城葉月、上原方希、緒方茂樹 (2005) 「音楽を活用した子どもの発達と評価に関する方法論的研究 —アセスメントツールと実践ツールの開発—」 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 第7号 pp. 59-84.